

<実践報告>

不登校児童生徒・保護者に対する担任・学校の支援の在り方
—担任・学校のどのような対応が支えとなるのか、また傷つけるのが—

棚田 祥子 飯田市立丸山小学校
上村恵津子 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Support of Homeroom Teachers and Schools for Non-attending
Students and Their Guardians

—What Kinds of Responses by Homeroom Teachers and Schools are Supportive,
and What Kinds are Harmful?—

TANADA Sachiko: Maruyama Elementary School, Iida City
KAMIMURA Etsuko: Center for Educational Research and Training,
Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	不登校児童生徒・保護者に対する担任・学校の支援のあり方について、自分の今までのあり方を振り返り、今後のあり方を考える
キーワード	不登校 児童生徒・体験者 保護者 支援者 担任・学校
実践の目的	不登校に対する担任・学校の対応について、当事者側の声を聞く。
実践者名	棚田祥子
対象者	不登校児童生徒・体験者・保護者・支援者
実践期間	2012年4月～2013年1月
実践研究の方法と経過	不登校児童生徒・体験者・保護者・支援者に実際に会い、不登校をした原因やきっかけ、担任や学校の対応、不登校をふり返って思うこと、担任や学校に望むことなどについてお聞きした。それらを、「不登校児童生徒・保護者にとって、担任・学校のどのような対応が支えとなり、どのような対応が傷つけるのか」という観点で分類・考察した。その結果、担任・学校が自分の価値観や一般論で対応すると子ども・保護者を傷つけることが多いことがわかった。担任は自分の価値観を見直し、子どもの気持ちを第一に考え、子ども・保護者に寄り添った適切な支援をアセスメントして行っていくことが大切であることがわかった。
実践から得られた知見・提言	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は、不登校に対する自分のとらえ方を見直す必要がある。 ・教師は、相談の最初の窓口は担任であることを自覚し、保護者の気持ちを傾聴し、不登校の子どもたちから新しい価値観を学ぶ姿勢を持つことが大切である。

1. はじめに

平成 24 年度文部科学省学校基本調査によると、23 年度の全国の不登校数は 117, 458 人で依然として多い。不登校率も中学校で 2.85%、小学校で 0.33%と各クラスに一人以上の不登校児童生徒がいるのが当たり前の状況であり、その対応に悩む担任や学校も多い。

教師が不登校の対応をするとき、心理的要因を重視し、とかく本人の問題であるにとらえがちである（小澤，2009）。そのため不登校児童生徒に対しては「わがままで」「精神的に弱い子だ」、保護者に対しては「甘い」「まず家でしっかり指導してほしい」といった見方、考え方で対応してしまっている担任も少なくないと思われる。また、適応指導教室や親の会・フリースクールについてもその正しい実態を把握しないまま「自由に過ごしていてよくない」「長くいたら学校に来られなくなる」などという偏見を持っている場合が多い（奥地，1991）。そして「あの子の不登校は自分がなんとかしてみせる」と過度な自信を持ったり、「あの子が不登校になったのは自分のせいだ」と落ち込んだりを繰り返している教員も多い（横田，2011）。

これは石隈・田村（2003）があげる「教師の三つのイラショナル・ビリーフ」や田村（2011）の言う「教師の『被援助志向性』の低さ」が背景にあると思われる。つまり担任は『教師は人の援助を受けるべきではない』『自分の学級の児童生徒は、担任の自分が全責任を負うべきである』『自分がいないと児童生徒はだめになる』と考え、真面目な教師ほど担任としての自分の責任を痛感し、一人で問題を抱え込み、自分の狭い経験や主観的な判断で対応してしまいがちになっている（田村，2011）。また最近の不登校には「多様化・複合化」が起きており（伊藤，2009），その対応はアセスメントに基づいて行うべきであるが（石隈，1999），アセスメントの方法をよく知らずに、経験や「（不登校は）待つことが大事」「不登校をしていると就職できない」といった一般論にのみ基づいて対応している教員も多い（奥地，1999）。

このような教員が不登校対応をしている結果、担任の言葉に傷つき、学校に対して不信感や嫌悪感を持つ子どもや保護者が少なくないのではないだろうか。実際に不登校の子どもや保護者から担任や学校に対する生の声を聞いたり、フリースクールや親の会を訪問したりすることで、子ども・保護者が担任・学校のどのような対応に傷つき、逆にどのような対応が支えとなるのか、あるいは望んでいるのかを考察していくこととする。

2. 実践概要

2.1 目的

不登校をした原因やきっかけ、不登校時の担任・学校の対応について当事者側の声を聞き、「不登校児童生徒・保護者にとって、担任・学校のどのような対応が支えとなり、どのような対応が傷つけるのか」を考察する。

2.2 方法

(1)対象者

現在不登校をしている児童生徒、過去に不登校を体験した若者、その保護者、不登校児童生徒保護者の支援をしている団体・機関・個人を対象とした。

(2)聞き取りの方法

不登校児童生徒の居場所、適応指導教室、親の会、支援団体、相談機関・個人を訪問したり、不登校に関わる集会に参加したりして、不登校時における担任・学校の対応について聞き取りをした。メモの許可が得られた場合は聞き取ったことをメモし、子どもが警戒してしまう等の理由で許可が得られなかった場合は記憶しておいてあとで書き起こした。訪問した機関・集会及び概要については表1に示す。

表1 訪問した機関・集会の概要・期間・回数・聞き取りの対象者・人数

名称	概要	訪問期間・回数	対象者
A市適応指導教室	市内に8か所あり立地場所・建物の雰囲気・指導員の個性・子どもたちの年齢や興味関心等によりそれぞれの良さがある。教室での過ごし方も教室によって違い、ゲーム・レク企画・おしゃべり・勉強・スポーツ・創作活動などを行っている。指導員は一人ひとりの子どもへの支援のあり方・学校との連携・教室内のルール作りなどを考えながら、子どもたちに粘り強く関わっている	4月～1月春と秋、各教室1回 うち2か所は週1～2回	小学生 中学生 (不登校中)39名 指導員8名
不登校の親と子の会D	22年の歴史のある親の会・居場所。月・水・金は子ども・若者(16才～30代前半)の居場所を確保し、10～15名がスポーツやゲームやおしゃべりなどを行っている。毎週水曜日は親が集まり情報交換や運営計画を行っている。月1回「親の会」があり15～20名ほどが悩み相談や情報交換をしている。	4月～1月毎週水曜日 月1回金曜日 若者の「語ろう会」(10月1月)	体験者15名 保護者20名
B市フリースクールE	不登校の子どもたちの居場所。農業体験や就労体験、学習支援などを行っている。	6月に1回	体験者1名 支援者1名
C県教職員組合教育相談室	子ども・親・教職員の教育に関する様々な悩みに、教員経験者が相談にのっている。不登校体験者の若者が訪れることも多い。	6月	支援者2名
A市教育相談センター	子ども・親の教育に関する様々な相談を受け付けている。不登校の相談も多い。	12月	支援者2名
通信制単位制私立高校F	不登校経験者を多く受け入れている私立高校。	4月	支援者1名
C県チャイルドライン	傾聴を徹底している。不登校の相談も多い	6・10・1月	支援者3名
その他	登校拒否・不登校を考える夏の全国大会 教育研究集会 ながの不登校を考える県民のつどい 元教え子や友人の子ども 元教員で個人的に相談活動をしている方	7月 11月 12月 8月 5・10・1月	体験者14名 保護者15名 支援者4名

2.3 結果

聞き取りで得られた内容について次のように分類した。(1)児童生徒・若者について
①不登校の原因・きっかけ ②不登校時においてa担任・学校の対応でいやだったこと b担任・学校の対応で嬉しかったこと、(2)保護者について①不登校につながった担任・学校のあり方 ②不登校時においてa担任・学校の対応でいやだったこと b担任・学校の対応で嬉しかったこと、(3)支援者について ①適応指導教室指導員 a担任・学校の対応で困ること b担任・学校の対応で良かったこと ②その他の相談機関・支援者・団

体 a 教師・学校の対応の問題点 b 教師・学校に望むことである。以下各項目ごとに結果を記す。

(1) 不登校児童生徒・不登校体験者から見た担任・学校の対応

①不登校の原因・きっかけについて

不登校に至った原因やきっかけは、友人関係・学業不振・教師への不満・集団への違和感など様々であったが、教師・学校の対応にしぼると「教師への不信感」に関する発言が多かった。「教師への不信感」を持った担任の言動を「理不尽な怒り方」「体罰」「価値観の押しつけ」「子どもの話を聞かない」「教師が自分を守る姿勢」の5つに分類した。

「理不尽な怒り方」では子ども自身の力ではどうにもならないことを責めたり、自分の好き嫌いや感情にまかせて怒ったりする担任、「体罰」では学習や休憩の機会を奪う担任、「価値観の押しつけ」では自分の価値観を通すことで子どもに無理をさせたり達成感を持たせられない担任、「話を聞かない」では子どもがいじめの相談をしても真剣に聞かなかったり、全員の子どものお話を聞く雰囲気を持っていなかったりする担任、「自分を守る姿勢」では自分の評価が下がることや傷つくことを怖れて、子どもと深く関わろうとしない担任への不信感についての発言があった。全体として、子どもの気持ちよりも自分の気持ちを優先した担任の言動に対して不信感を持ったという発言が多かった。代表的な発言を表2に示す。

表2 「教師への不信感」の代表的な発言

理不尽な怒り方	・小3の担任は算数がわからなかったときに「何でわからないんだ」「この前も言っただろう」と怒った。逆らいたくても子どもは何がおかしいのか説明できない。(高1女 小中不登校) ・小4の担任は気に入った子と気に入らない子を分ける人だった。自分は気に入られず、教室移動時に階段の手すりをさわっただけで怒られた。怒る理由なんて何でも良かった。(28才男)
体罰	・小学校担任の体罰が原因で不登校になった。椅子を外され、次は背中にもものさしを入れられ、そうなるど勉強どころではなかった。(28才男 小5~中3まで不登校) ・自分は小食で給食が時間内に食べられなかった。小学校の担任は全部食べ終わるまで昼休みも掃除の時間も食べさせた。(高3男 中2から不登校)
価値観の押しつけ	・宿題の提出率が100%じゃないと意味がなく98%だと先生は認めてくれなかった。(20才女 中3で一時不登校) ・小5担任が完璧主義ですぐ怒り嫌いだった。(中3男 小5・6不登校)
話を聞かない	・友達とけんかした時よく話を聞かずに私が悪いと決めつけた。(小5女) ・「先生は何もわからない」と思っているから先生には何も言わないが、先生から見て何も問題がないと見える子でも、何かを思っている。(17才男) ・いじめに遭い担任に相談したが「気のせいだろ」と言われた。(高2年女)
自分を守る姿勢	・先生はトラブルを面倒くさがり、子どもと深く接しようとしなない。いじめについても世間体や親の機嫌をうかがっている。表はきちんとしているけど、中身はできていないから説得力がない。(中3男)

②不登校時における担任・学校の対応

a 担任・学校の言動でいやだったこと

「家庭訪問」「登校したときの言葉掛け」「クラスメイトからの手紙」「進路に関わって」の4つの場面に分類した。「家庭訪問」については来られていやだった派もともと来て欲しかった派に分かれた。「登校したときの言葉掛け」については、子どもはやっとの

思いで登校したのに担任や他の教員が労うどころかもっと学校にいることを要求したことへの不満が多かった。不登校中にクラスメイトからの「手紙」をもらったという体験も多いが、嬉しさよりもプレッシャーや教師の意図を感じている。中3で「進路」に直面したときの担任の言葉がけについての不満も聞かれた。全体として、担任としては奮起や励ましの意図で行った言動が、不登校生徒にとってはプレッシャーになっていた(表3)。

表3 子どもにとって「担任・学校の対応でいやだったこと」の代表的な発言

家庭訪問に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・うちは兄も不登校だった。担任は「家庭の問題だ」と怒鳴り込んできた。母親が先生に怒られているのを見るのはつらかった。(24才男) ・先生が家に来るのがいやだったが「来ないでほしい」とは言えず2階や屋根の上に逃げていた。感じ取ってほしかった。(20才男 中学不登校) ・家庭訪問がどんどん少なくなっていった。(高3男 中2から不登校)
登校したときのことば掛けに関して	<ul style="list-style-type: none"> ・しばらく休んでいてやっと学校に行ったら、先生に「よく来たな」ではなく「もっと来いよ」と言われた。(中2男) ・1時間だけの約束で登校したのに「もう1時間」と言われた。(中2男) ・中3の担任は『クラス全員で卒業式に出ること』を目標にしていた。事前練習で『今日は見学だけ』という約束で登校したのに、「とにかくみんなの中に入れ」と言われて腕を捕まれた。振りほどいて逃げた。(高1女)
手紙に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・中3で職員室登校をしたらクラス全員から手紙をもらい「やっとお君が来た」とか書いてあったが「俺はどうすればいいの」と感じた。(31才男)
進路に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・中3のとき担任に「今のままじゃ行ける高校がないぞ」と脅された。そのときは鵜呑みにしてしまったが、実際は進学できた。(高2女)

b 担任・学校の対応で良かったこと・嬉しかったこと

子どもと接触ができないと教師は意欲を失いがちだが、「連絡をとり続ける」とこと「子どものエネルギーがたまるまで粘り強く待つ」ことが大切であることが子どもたちの発言から読み取れる。代表的な発言を表4に示す。

表4 子どもにとって「担任・学校の対応で嬉しかったこと」の代表的な発言

連絡を取り続ける	<ul style="list-style-type: none"> ・先生が家に来ても自分は会わなかったが、月に一回の家庭訪問を卒業まで続けてくれ、卒業後も声を掛けてくれた。(定時制高3年男 中学不登校) ・修学旅行や文化祭などに誘ってくれ、つながりがもてていた。(高3男)
粘り強く待つ	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に来させようという無理強いがなかったため自分を見つめる時間が持てた。(同上)

(2) 保護者から見た担任・学校の対応

①保護者が考える子どもの不登校の原因

子どもが不登校になった原因がわからないことも多いが、「担任の価値観のせまさ」「感情的な怒り方」「点数化された評価の仕方」に原因を感じている保護者もいる(表5)。

表5 「我が子の不登校の原因に通じた担任・学校のあり方」についての代表的な発言

価値観のせまさ	<ul style="list-style-type: none"> ・先生は自分が感動する言葉しかとりあげない。学級通信も先生が感動したことをドラマ仕立てで載せるだけ。
感情的な怒り方	<ul style="list-style-type: none"> ・小3・4の担任は、清掃時子どもがぬれ雑巾で黒板を拭いたら「5時間目に授業ができないじゃないか」と激怒し、机と子ども廊下に出された。 ・小1の担任は、給食も食べられなくなった息子の口に無理やり給食を押し込んだ。
点数化された評価	<ul style="list-style-type: none"> ・中学の通知票には、発言の回数・宿題の提出率があり、できない子にとって授業はつらいことだと思った。

②不登校時における担任・学校の対応

a 担任・学校の対応でいやだったこと

「登校をしぶりだしたときの対応」「家庭訪問の方法」「連絡の取り方」という場面に関わるものと「保護者の苦しさへの不理解」「子どもの苦しさへの不理解」という担任・学校の基本的な考え方に関わるものの計5つに分類した。保護者は子どもが登校をしぶりだしたときに担任や管理職に相談に行くことが多いが、担任や管理職が子どもや保護者の気持ちを傾聴しないことへの不満が多い。そして本格的に不登校になったとき、担任が自分の都合や思いを優先した家庭訪問をしたり、連絡をおろそかにしたり、保護者の苦しさを理解せずに「育て方が悪い」などと決めつけたり、子どもの苦しさを理解せずに表面的な言動だけを見て対応したりすることへの不満もある。担任が自分の価値観や満足感を優先して保護者に対応すると、保護者は深く傷つき担任・学校への不信感を高めていることが伺える。また、担任・学校が地域の適応指導教室やフリースクール・親の会についての情報を持っていなかったり、偏見を持っていたりすることに対し「正しく知り、伝えて欲しい」という願いを持っている。代表的な発言を表6に示す。

表6 保護者にとって、「担任・学校の対応でいやだったこと」の代表的な発言

登校をしぶり始めたときの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが「先生が怖い」と言うので学校に聞いたが「元気にやっていますから大丈夫ですよ」と言われそれ以上聞けなかった。 ・「教師人生で不登校が出たのは初めてだ」と言われた。 ・学級PTAで、「自分(担任)も不登校だったが克服した」と言われた。 ・休み出した当初はもっと丁寧に子どもの気持ちを聞いてほしかった。 ・「とにかく学校によこしてください。そうすればあとはこちらで何とかしますから」と言われたが、学校に行けないから苦しんでいる。 ・「親の会やフリースクールを紹介してほしい」と頼んだが「学校のことは学校で対応する。学校に居場所を作る」と言われた。先生たちは適応指導教室やフリースクール・親の会について情報を持ち、紹介してほしい。 ・担任は自分(母)が親の会や相談機関に行くことをよく思っていないらしく、「何でそんなところに行くんだ」と言われた。
家庭訪問の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・中学入学時、新担任が「何かやってみたい」と毎日家庭訪問し、「また来るからな」「何で学校に来ないか話すように」と子どもに声を掛けていた。 ・「学校でこんないいことがあった」と学校に行きたくない子に話していた。 ・担任は「一週間に一度家庭訪問をします」と言い、最初のうちはよく家庭訪問に来ていたが、だんだん来なくなった。 ・同級生二人を連れて家庭訪問に来た。子どもは目を合わせられなかったのに、後日同級生5人の手紙を持ってきた。子どもの心を見ていない。
連絡の取り方	<ul style="list-style-type: none"> ・ずっと放っておかれたのに、進学・卒業前になったら「来い」と言われた。 ・欠席連絡を毎日学校にするのがつらかった。 ・テストや教材など「やる気になったときないと困るから」と担任は言うが、いるかいらないか聞いてほしい。使わなくても毎月の学年費を払っている。
保護者の苦しさへの不理解	<ul style="list-style-type: none"> ・担任や教頭先生に「親が甘い」「お母さんが勤めていたら子どもを起こして学校に行かせると思う」などと言われ切なかった。 ・支援会議で「親が変わることで登校できるようになった例」を話され、責められた思いだけが残った。
子どもの苦しさへの不理解	<ul style="list-style-type: none"> ・学級通信に娘のことを全面に書かれた(なぜ不登校になったのか、君達はoさんが登校したとき受け入れ体制があるのかなど)。とても頭にきた。 ・担任に「1時間だけ」と誘われ子どもは「はい」と言っていくが、どっと疲れて帰ってくる。「いやだ」と言えない子どもの心を理解していない。 ・「ゲームばかりではだめ」「昼夜逆転しないように」と言われた。なぜ子どもがゲームをしたり昼夜逆転になったりするのかわかってくれない。

	・卒業記念撮影に登校したら、担任は大喜びをし「今日来られたから明日も」と声を掛けた。や っと学校に行った子どもの気持ちが分かっている。
--	--

b 担任・学校の対応で良かったこと・嬉しかったこと

「家庭訪問の方法」「連絡の取り方」「子どもの苦しさへの理解」の三つに分類した。学校に来て欲しいという担任の気持ちを優先せず、子どもの気持ちを第一に考えた支援を保護者と協力して行っている教師、子どもと会えなくても保護者との関わりを大切に継続する教師を保護者は求めていることが伺える。代表的な発言を表7に示す。

表7 保護者にとって、「担任・学校の対応で嬉しかったこと」の代表的な発言

家庭訪問の方法	・新年度担任が替わったとき「家庭訪問はどうしますか」と聞いてくれた。 ・学校の話やラーメンの話をして帰っていった。
連絡の取り方	・子どもが先生に会いたくない間は、訪問はなかったが保護者とは連絡を密にしてくれた。
子どもの苦しさへの理解	・家庭訪問に来た担任に子どもは「用もないのに来るな」ときつい言葉を言ったのに、先生は子どもを見捨てず、母が渡した本を読んで不登校について勉強してくれた。 ・「部活にだけ復帰したい」と伝えたら、復帰方法を一緒に考えてくれた。

(3) 不登校児童生徒・保護者を支援している方からみた教師・学校の対応

①適応指導教室指導員

a 教師・学校の対応で困ること

適応指導教室の指導員は担任・学校に対し、「適応指導教室の役割への不理解」や「連絡・協力のしづらさ」を感じている。適応指導教室は学校と同じような生活指導や学習指導をするところではなく、傷ついた子どもたちが、先生や仲間との関わりを通して、自己肯定感を取り戻したり、自分の気持ちや目標とじっくり向き合ったりするところである。そして指導員は子どもの状況や気持ちを見極めて登校刺激も行っている。それを理解していない担任・管理職が「とにかく早く学校へ」を前提とした発言をしたり、預けたままで連絡を疎かにしたり、やっと登校した子どもにその背景を考えない声掛けをしてしまったりしていることが指導員の発言からみえてくる。代表的な発言を表8に示す。

表8 適応指導教室指導員にとって「担任・学校の対応で困ること」の代表的な発言

適応指導教室の役割への不理解	・訪問に来た先生が「こんな自由なことをしていいの」「学校の要素がない」と言う。学校と同じにしたならこの子たちはここに来られない。 ・「適応指導教室に子どもを送ったら恥だ」と言った担任、「どうしてここに来るようになったのかなあ」と言った校長。 ・「ここに長くいると学校復帰が遅れるのでは」と言われた。ここにいることを悪い事だとか恥ずかしいことだと子どもに思わせたくない。 ・この教室へ来るまでの子どもの苦勞や葛藤、この教室での変化や成長を知ろうとせず「こんなに元気なら学校へ」と子どもに言ってしまう。
連絡・協力のしづらさ	・学校によって対応が違う。(窓口になる先生との連絡のとり方・訪問の回数・担任の挨拶ありなし・管理職の考え方・支援会議の方法等) ・適応指導教室に預けたら丸投げになってしまう担任や学校。 ・やっと試験を受けに行った生徒に「教室で皆と一緒に受ける」と言う担任。

b 教師・学校の対応で良かったこと

指導員は、担任・学校が自分たちから連絡をとり、積極的に教室の様子や子どもたちの様子を知らうとする姿勢や、指導員と担任・学校が子どものことを一緒に考えて行く関係を望んでいる。代表的な発言を表9に示す。

表9 適応指導教室指導員にとって「担任・学校の対応で良かったこと」の代表的な発言

連絡・協力のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ・校内調整し、理科専科が実験道具を持って授業をしに来てくれた。 ・ある中学校の校長先生は、ふらっと来てどこかのおじさんというような顔で座り、子どもたちの話をにこにこして聞いてくれる。 ・登校支援コーディネーターが短時間でも頻繁に訪問してくれる。 ・子どもが登校した日に、学校から様子を知らせてくれる。それを聞いて翌日かける言葉を考えることができる。 ・先生方が自分の顔や子どもの様子を知っていて、よく声をかけてくれる。支援会議にも呼ばれる学校は、一緒にアセスメントすることができる。
-----------	---

② その他の相談機関・支援者・団体

a 教師・学校の対応の問題点

これらの機関・団体は、子ども・保護者の担任・学校には言えない生の声を聞いている。そこから、教師がいかに関心不足しているか、いかに関心不足しているか、「自分の価値観や一般論で対応」してしまっているかを感じ取り、指摘している（表10）。

表10 相談機関・支援者からみた、「教師・学校の対応の問題点」の代表的な発言

傾聴する力の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者は困ったことがあつたらまず担任に相談に行く。そこで担任が「傾聴」ができず、事柄（いつから不登校なのか、担任の対応はどうだったのか 等）を聞いてしまう。（A市教育相談センター） ・子どもが先生に相談しても「大丈夫だよ。気のせいだよ」と言ってしまう。（C県チャイルドライン） ・保護者からの相談で多いのは「担任から何の連絡もない」ということ。寂しさは人のエネルギーを奪っていく。（A市教育相談センター）
教師の価値観や一般論での対応	<ul style="list-style-type: none"> ・「秩序が保てなくなる」と言ってフリースクールを紹介しながらない。誰のための秩序なのか。（B市フリースクールE） ・「学校に来るか来ないか」の二者択一にしてしまう。登校しないのは悪いことではない。学校以外の場での育ちも知っていくことも必要。（元教員） ・保護者に対して「母子分離不安だ」「父親が関わっていないからだ」などと決めつけてしまう。たっぷり甘えた子は親から離れていく。父親が関わらないのは父親も悩み苦しんでいるから。（元教員）

b 教師・学校に望むこと

支援者の多くは、教師が傾聴する力をつけることや価値観を広げることが望んでいることが伺える。そして、教師が自分の価値観やプライドを横において子どもや保護者の気持ちに寄り添うことが、不登校児童生徒・保護者の支えになり、登校につながることを示唆している。代表的な発言を表11に示す。

表11 相談機関・支援者からみた、「教師・学校に望むこと」の代表的な発言

不登校への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・先生は「来て欲しい」「今は来られないけどそれでいいんだよ」「でも君のことが好きだよ」と伝え続けてほしい。（B市フリースクールE） ・一番困っているのは子ども。先生は自分の価値観や常識を横において子どもや親の話を聞いてほしい。人は心が安寧の状態になると元を取り戻し、自分で解決する方法を考えることができる。（A市教育相談センター） ・学校で親の会をやるとき、「かわいそう」「大変」で終わってしまう。先輩の母とか不登校に詳しい医師など外部の風を入れるといい。（元教員）
教師・学校のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ・入学希望者に「勉強は好きか」と聞くと「勉強は嫌い」と大抵の子が答える。小中でなぜ学ぶのかを考えさせてほしい。（通信制単位制私立高校F） ・担任だけで35人の子どもの向き合うには限界があるという自覚が必要。助けを求めることが大切。ふだんから教員同士がコミュニケーションをとり、お互いの良いところや援助資源を知っていることが大切。（元教員）

3. 考察

この実践から、不登校児童生徒や保護者にとって、担任が自分の価値観や一般論に基づいて対応すると、子どもたちや保護者の心を傷つけ、エネルギーを奪ってしまうことがわかる。どんな対応がよいのかは、子どもの状態や気持ちによって違ってくるが、担任が子どもの気持ちを第一に考え、決して見捨てず関わり続けてくれることを子どもは望んでいることがわかる。

子どもたちの発言から、担任は子どものためと思って指導しているつもりでも、それが「不登校はわがままで」「今厳しくしておかないと将来就職できない」などの価値観に基づいていると、子どもたちはますます自分を責めたり、将来が不安になったりしてしまっていることがわかる。また担任が「家庭訪問は週に一回するものだ」などという一般論や「自分はこれだけのことをやった」「自分が登校させてみせる」などの教師の思いを優先して家庭訪問をしたりクラスの子に手紙を書かせたりすると、子どもたちは担任への「わかってくれない感」を強め、エネルギーをためるところかすり減らしてしまっている。中学で不登校だった高3男子が「放っておいてほしいけど見捨てないでほしい」と発言したが、これこそが担任・学校の対応の基本だと思う。しかしだからと言って何もしないで待っているということではない。小澤（2009）は不登校のタイプを「心理的・教育的・福祉的」か「急性型・慢性型」かにより6タイプに分け、不登校の回復過程については前兆期から社会復帰までの5段階に分けている。このように不登校の原因や状態は子どもによっても時期によっても違う。担任はそのことをふまえてアセスメントを行い、子どものニーズにそった援助を行っていくことが必要である（石隈，1999）。そして常にその援助は子どもの気持ちを大事にしてのことなのか、それとも自分の思いや価値観の押しつけなのではないかを自分に問うていくことが大切であろう。

保護者からの聞き取りからは、保護者が我が子の不登校を通して、今まで当たり前に行くと感じていた「学校」というものや「教師のあり方」を見つめ直すようになることが多いことを感じた。その一方で担任が自らの価値観を見つめ直すことなく、「昼夜逆転を改善すべきだ」「親が変われば子どもも変わる」などという価値観や、「クラス全員そろいたい」「とにかく子どもに会いたい」などという自分の思いに基づいて対応すると、家で子どもと一緒に苦しんでいる保護者は、教師への不信感をつのらせていってしまう。ある保護者は「『親のエゴ』に気づかせてくれたのがわが子の不登校だった。親も先生も不登校から学ぶ姿勢で一緒に子どもの気持ちを考えたい。」と語っている。また NPO 法人東京シューレ（2005）、奥地・矢澤（2012）は不登校体験者が現在自分の道を歩んでいる例を数多く紹介している。さらに小・中学校不登校だった高2女子は「不登校をしたからこそいろいろな出会いがあり、自分のやりたいことをじっくり考えることができた。不登校はそんなにネガティブなものじゃない」と発言している。教師は不登校の子どもたちから新たな価値観を学んでいく姿勢が大切であろう。

適応指導教室指導員の発言からは、担任・学校が適応指導教室の役割や子どもの現在の

状態に至るまでの背景や気持ちを理解しようとしないう言動が、せつかく登校した子どもの心を折れさせたり、指導員の悩みを増やしてしまったりしていることが伺える。担任・学校が適応指導教室の役割を理解し、連絡を密にとっていくことが、指導員を勇気づけ、子どもたちの登校にもつながりやすいと思われる。

その他の相談機関・団体・個人の発言から、教師が自分の価値観や一般論で不登校に対応していることへの不満が、相談機関や支援者に寄せられていることがわかる。教師はこのことを真摯に受け止め、傾聴する力をつけたり、相談機関やフリースクールについて正しい情報を収集したりして必要がある。

担任・学校が不登校のない楽しく充実したクラス・学校を目指していくことは不登校対策の大前提である。しかし子どもが不登校になったとき、ふだんから担任が不登校についてどのような価値観を持っているかによって、対応の仕方は大きく違ってくるだろう。それによって子どもや保護者は傷つけられもすれば、支えられもするだろう。担任は、教師が持ちやすいイラショナルビリーフや被援助志向性の低さから、自分だけの価値観で不登校に対応してしまいがちであるが、そのことを自覚し、不登校についての自分の価値観をみつめ直し、子どもの気持ちを第一に考えているかを問い続けたい。そして自分の強みや弱みを理解し、同僚はもちろん学校以外の人の価値観も学び、自分自身の援助資源を豊かにしていきたい。そして粘り強く子どもや保護者と関わり続けていきたい。

文献

石隈利紀, 1999, 学校心理学, 誠信書房, 東京都

石隈利紀・田村節子, 2003, 石隈・田村式援助シートによる チーム援助入門—学校心理学・実践編, 図書文化社, 東京都

伊藤美奈子, 2009, 不登校 その心もようと支援の実際, 金子書房, 東京都

文部科学省 平成 24 年度学校基本調査

NPO 法人東京シューレ, 2005, 学校に行かなかった私たちのハローワーク, 東京シューレ出版, 東京都

奥地圭子, 矢澤久泰, 2012, 僕は僕でよかったんだ, 東京シューレ出版, 東京都

小澤美代子, 2009, 続上手な登校刺激の与え方, ほんの森出版, 東京都, pp8, pp.40-45

田村修一, 2011, 教師の被援助志向性とチーム援助, 児童心理, 2月号臨時増刊, pp19-26

「東京シューレ」の子どもたち, 1991, 学校に行かなかった僕から学校に行かない君へ, 教育史料出版会, 東京都

横田隆, 2011, 不登校の子を担当する教師をどう支えるか, 児童心理, 6月号臨時増刊, pp104-105

(2013年5月28日 受付)